211

鍛冶屋馬場遺跡

（川内市平佐町字鍛冶屋馬場）

位置と環境

遺跡は，JR鹿児島本線川内駅から北西約350mに位置する。川内川の氾濫によって形成された標高4m程の自然堤防上に立地しているため，旧地形は平野の中でも高い場所であったと考えられる。川内川からの距離は約30mで，洪水時には水に浸かる場所である。川の対岸には大島遺跡（奈良時代～平安時代）が所在している。

調査の経緯

遺跡の調査は，九州新幹線鹿児島ルート建設に先立ち，平成12年（西暦2000年）に鹿児島県教育委員会によって発掘調査が行われた。調査面積は1,944㎡である。

遺構と遺物

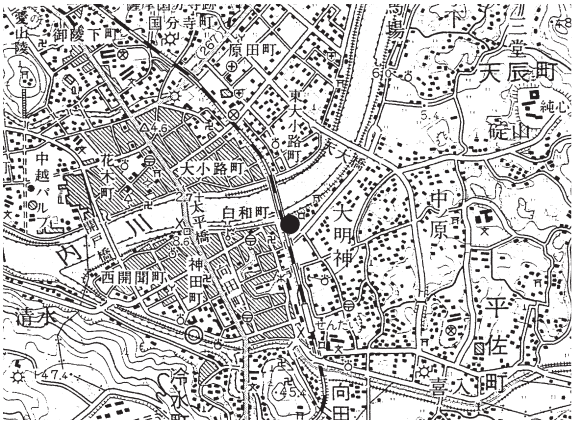
調査では平安時代，江戸時代の初め頃，江戸時代の終わり頃の遺構・遺物が発見された。

平安時代（10世紀頃）の遺構は，掘立柱建物跡5棟，竪穴住居跡1軒，鍛冶炉6基，貯水用の土坑2基，土坑7基，溝跡6条，畠跡，柱穴などが発見された。遺構の周辺からは，土師器，須恵器，焼塩土器，鉄製品，砥石などが出土した。

鍛冶炉は，周りを溝で囲まれており，生活をする場所と切り離されている。鍛冶炉の中からは，鉄製品を作る作業中に出てくる不純物（鉄滓）や小さな鉄片が見つかっている。遺跡からは，鉄で作られた鎌の刃，木を削ったりする刀子，糸を紡ぐ紡錘車，鋤先，釘など様々な種類の鉄製品が発見された（写真1）。このことから鍛冶屋馬場遺跡には鍛冶を専門に行う人々が暮らしていたことが明らかとなった。

また，遺跡を覆っている土の観察から，集落は洪水によって一度埋もれていたことが分かった。しかし，洪水の直後に，もう一度集落を作り鍛冶を行っている。当時の人々は，川内川の水運がもたらす恩恵と，洪水による脅威と共存しながら暮らしていたのである。

室町～江戸時代初め頃の遺構は，土壙墓3基，土坑9基，溝跡5条，井戸跡1基がある。墓である土壙墓は，3基とも穴を掘った後に，床面に青灰色の土を敷き詰めてその上に遺体を置き埋葬していた。土壙墓の中からは洪武通寶と呼ばれる銅で作られた当時の銭が見つかっている（写真2）。



第1図　鍛冶屋馬場遺跡の位置

江戸時代の終わり頃の遺構は，溝跡2条，鉄滓が捨てられた土坑1基，柱穴などを検出した。溝内からは，肥前（佐賀県）や地元で焼かれた陶磁器が発見された。溝跡には多量の鉄滓が捨てられていて，近くで鍛冶が行われていたことが推測される（写真3）。溝跡は鍛冶に使用する水の貯水や排水に使用されたと考えられる。また，出土した陶磁器類は当時，川内で焼かれた平佐焼きの研究に役立つことが期待されている。

特徴

鍛冶屋馬場遺跡の大きな特徴は，川内川に近い立地で，鍛冶を作る原料の輸入や製品の運搬に川内川を利用できるという利点がある反面，洪水による危険性が高い場所である。このような場所で平安時代に始まった鍛冶は場所を変えながらも現代まで続いてきた。本遺跡の調査は，川内川と古代の人々の関わり知る上で重要であるとともに，古代の鉄生産や原料の入手などについても多くの知見をもたらしてくれた。

資料の所在

出土遺物は，鹿児島県県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2002「鍛冶屋馬場遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』39

（川口　雅之）

写真１　平安時代の鉄製品（鎌・鋤先・紡錘車）

写真２　土壙墓（中央に見えるのは洪武通寶）

写真３　溝跡に捨てられた鉄滓